『西南アジア研究』No.45, 1996

チョルマガン・タマチ軍の対外活動

北 川 誠 一

はじめに

モンゴル帝国は,チョルマガン・ノヤン Chormaqan Noyan[1] 麾下の軍隊をジャラールッディーン・ホラズムシャー掃討のためイランに派遣した。この軍隊はジャラールッディーンの死後も西イランに留まって,後にイルハン国が形成されるまで,モンゴル帝国西南部における領土拡大と治安の確立に務めた[2]。チンギス・ハンの遠征以後も帝国の支配権が確立していなかった西イラン,ザカフカースに統治の手が及び,ルーム,ジャズィーラ,シリア等の諸国が年貢を納めたのは,チョルマガンと彼の後継者バイジュの功績が大きかった。この軍隊の機構と組織の沿革については,志茂碩敏氏の精緻な研究があり大方は言い尽くされているが,ここでは対外的軍事活動について贅言をつけ加えたい。

I 組 織

チョルマガンがこの軍隊の長であったことは,あらゆる資料で一致しているが,1248年筆写のあるアルメニア語写体の奥付は,チョルマガンと他の2名の同僚との間に占領政策に関して論争があったことを記す[AIM:48-47]。グリゴル・アクネルツィ[PAN:298-301]も同様の物語を伝え,更に,就寝中に死亡した2名の同僚として,ベナル Benal とムラル Mular の名を与えている。ベナルについて,ボイル[JB:1,90n]は,チンギス・ハン征西時,1万人のトルコマン兵を率いていたタイナル Tainal との同定を示唆したが,タイナルの名はグリゴルのモンゴル人武将リスト中にもある。ムラルについては,ガズナ作戦に従事した Molghor との比定を示唆するが[JB:2,405n],キラコス・ガンザケッツィとヴァルダン・アラヴェルツィも Molar Noin [ChV:144;Dul:283]について述べる。

ナサヴィーが,624(1226/7)年にイスファハーンを攻撃したモンゴル軍将軍の名として,バイジュ Bāichū・ノヤン,バイナル Bāinal・ノヤン,ヤグ Yāqū・ノヤン,エセントガン Esen Toghān・ノヤン,バイムラース Bāimlās・ノヤン,ヤサウル Yāsavr・ノヤンの名前を挙げ[SJM:167;Zhi:181],また,ジュヴァイニー[JQ:Ⅱ,168;JB:Ⅱ,436]が,624(1226/7)年,ジャラールッディーンは,イラーク・アジャミーにタイマス Tāimās とタイナル Tāināl が到着したとの報に,その方面に向かったと述べている。バイナルはタイナルと,バイムラースは

タイマスと同じであろう。このタイマスについて，ジュヴァイニーは[JQ：Ⅱ，188；JB：Ⅱ，456]，ウゲディが，ジャラールッディーンに最後の一撃を加えるのは彼であると予言したことを述べている。グリゴルのベナルは，バイナル～タイナルと同じであろうし，ムラルも，バイムラース～タイマスの異綴であるかもしれない。ナサヴィーとジュヴァイニーの記事からチョルマガンの幕下には，チンギス・ハンの西征に参加し，その後バスカークとして旧ホラズム領に配置された諸将軍が多数参加していたと考えられるのである。

この軍隊の兵員数について，ジュヴァイニーは，「彼(ウゲディ)は，(チョルマガン)を一団の将軍達，3万人の兵士とともに派遣した[JQ：Ⅰ，149-50；JB：Ⅰ，190]，ラシードッディーンも「チョルマガン＝ノヤンと多数のアミールを3万人の騎士と共に」に派遣した[RA：56；RB：33]ことを述べる。また，キリキアの王族ヘトゥムの記した『東方史の花』[FLo：307]にも次のようにある。

> オゴタイ・ハンはバイジュを彼らの言葉でカマチ camachi 即ち，征服者と呼ばれる3万のタタール人とともに派遣した。

しかし，ナサヴィーは，捕虜の自供として[Zhi：280； SJM：258]，

> スルタンの軍隊と決戦するために，チョルマガンが出陣の準備を望んだとき，ボハラで閲兵し，2万人の兵士を登録したが，その他に多数がいる。

という情報を記す。正規軍の兵数は，公称3万，実数2万程度であったと考えてよいであろう。

組織に関しては，史料の間に微妙な際が認められる。『集史』「部族誌」スニト部の項では[RA：Ⅰ-i，150-153]，

> チョルマガンを4万人隊(tūmān)の探馬(tamā)の兵と共に任命し，この地方に派遣した。(中略)この軍隊の中で万人隊長であったのは，ベスト部で，ジョベの親族であったバイジュであった。チョルマガンが死亡すると，カーンはバイジュに彼の地位を継がせた。(中略)万人隊長の一人は，コルラス部でチンギス・ハンの時代に大アミールであったイェケ・ヤサウルであった。(中略)もう一人の万人隊長はマリクシャーで，ウイグル，カルルク，トルコマン，カシュガル，クチャから集められた軍隊が彼に与えられた。

とある。これによると，先に引用された史料とは異なり，チョルマガン軍は4箇の万人隊に組織されていて，チョルマガン自身，バイジュ，イェケ・ヤサウル，マリクシャーの4名が万人隊長であったことになる。同様に，グルジアの歴史書『モンゴル人侵入史』は，次の様に述べる。

①(オゴタイは)グルジア人によってノヤン Noin と呼ばれた4人の隊長，第一は，チョルマガン Charmaghan，第二はチャガタイ Chaghatha，第三はヤサウル Iosuri，第四はバイジュ Bicho を指名した。彼は彼ら各人に，1万人の兵士と妻を与え，スルタンの追跡に派遣した[KTsK：68；KTsB：511]。

②この知らせ(フラグの来着)を聞いてノヤン達，チョルマガン，ヤサウル，バイジュ，アングラグ Angurag は，グルジアの領主達，就中エガルスラン Egarslan を連れて，フラグのもとへ行った[KTsK：103；KTsB：540]。

既に死亡しているチョルマガンの名が挙がっているのは間違いであるが，アラムートで死亡した大チャガタイに替わってアングラグの名を挙げて，万人隊長が4名であることを示す。しかし，『集史』「部族誌」ベスト部の項では[RA：541]，

バイジュはジョベの親族であった。ウゲディ・カーンは彼をチョルマガンとともに派遣した。彼は千人隊を治めていた。彼の後，万人隊を治めた。

とあり，明らかにバイジュ・ノヤンは，最初千人隊，後に万人隊長に昇進したと記されている。一方『モンゴル人侵入史』の記事は，万人隊長が4人いたことを述べるのであって，万人隊数を4としているのではない。ラシードッディーンも「4万人隊」と記しながら，万人隊長の数は3人しか挙げていないのであるから，この「4万人隊」と述べる真意は，歴代4人の万人隊長がいたことにあるのではないであろうか。そうすると両史料の差は，4人目の万人隊長が，チャガタイなのかマリクシャーなのかということだけであるが，志茂碩敏氏はマリクシャーの部隊をアゼルバイジャン鎮守府の第3万人隊と理解している[志茂 1994：99]。

さて，このマリクシャーの部下はウィグル，カルルク等の兵士からなっている。タマチ軍はモンゴル帝国に特徴ある軍制であって，この兵団以外にも各地に多数のタマチ軍が設置された。この内最も実体が知られているのは，北中国に置かれたウルート，マングート，イキレス，ホンギラト，ジャライル部出自の諸将が指揮するタマチ軍である。この5箇の部隊の下に，ウィグル，契丹，女真の徴募軍，更にその下に現地漢人世侯の徴収軍がいた[3]，チョルマガンのタマチ軍もこの3兵種からなっていた。先ず，ホラズムの総督チンテムルは，ホラズムからチョルマガンのもとへ分遣隊派遣の命令を下している[JQ：Ⅰ，268；JB：Ⅱ，532]。次に，チョルマガンの軍政下に旧アゼルバイジャン・アタベク家のノスラトッディーンが「タブリーズとアゼルバイジャンの tūmān の指揮官」に任命された[JQ, 2, 247-8；JB, 2, 511]。また，1236年以降チョルマガン軍に降伏したグルジアにおいても王侯には，万人隊長の資格が与えられた。『モンゴル人侵入史』には[KTsK：90；KTsB：Ⅰ-1, 529]

ノヤン達はグルジアの領主達を分けて，万人隊長すなわち，トマンの君侯(dmanis mt'avari)と呼んでいた。彼らに任命された隊長の第一の者は，雄弁家，勇敢な戦士，しかし一物も持たぬエガルスラン・バクルツィヘリであった。彼はヘレティ，カヘティ，カムベジャニ，トビリスィからシャマハの山々までを託された。シャンシェは自分の領地の他にアヴァグの領地を与えられた。ヴァフラム・ガゲリには全ソムヘティ，グリゴル・スラメリはカルトリ，エガルサランに並ぶ勇士トルのガムレケリは，ジャヴァヘティ，カルヌカラキに至るまでのサムツィヘを治めた。ラチャの君主(eristavi)ツォトネ・ダディアニはリヒの山々に至るまでの王国の全てを治めた。

とある。アゼルバイジャンとグルジアでは現地徴収兵による万人隊が編成されていたことになる。マリクシャーは，モンゴル正規軍の万人隊長ではないと思われる。

チョルマガンの幕僚には，大小2名のチャガタイがいる。小チャガタイは，チャガタイ・ハンの死後，名を忌んで改名した[RA：Ⅰ-i, 156-7]が，大チャガタイは，ラシードッディーンは

[RA：Ⅰ-i],

別のアミールにゴルチであったアルラト部のボルチ・ノヤンの親族の大チャガタイがいた。彼はイスマイル派に暗殺された。彼の息子達はドラダイ・ヤルグチ,バイチムル,カラブルガン,サルタクタィであった。ドラダイの息子はアシク・テムル,バイテムルの息子はトゥグテムル,上述のカラブルガンは千人隊長であった。

と述べる。大チャガタイが暗殺されたのは,当然チャガタイの死より前でなければならないから,フラグ,アバカに仕えた小チャガタイ即ちスンタイではなく,大チャガタイが『モンゴル人侵入史』の「チャガタイ」である。キラコス[PHKh：174；PHM：275；PHA：197；Dul：16-17]は,

他の全ての者の上に置かれた最も地位の高い長は,次の者達である。軍隊の最高指令官に加えて,裁判を命令されていた(hramanatun)チャルマガン・ノヤン,および彼の補佐役イスラル・ノヤン,グトウン Ghutun・ノヤン,トゥトゥン Tut'un・ノヤン,ムラヒダ Mulhed に殺された軍隊の指令官チャガタイである。

と述べ,また,[PHM：320；PHKh：197；PHA：228；Dul：455]「主要な隊長の1人(mi vomn yavag glkhavorats'b)で,全軍の指令官(zōravar amenayn zōrun)だったチャガタイという名の者」等とあって,チャガタイの地位が高かったことを推察させる。イスマイル派の刺客がチャガタイを暗殺したのは,彼が包囲軍の最高司令官であった,即ち,彼が万人隊長であったことを意味しないであろうか。

ラシードッディーンは,チャガタイの4名の息子の名を記す。この内,千人隊長であったブルガン(カラブルガン)は父親の仇を討つためロクヌディーン・フルシャーの降伏後,彼の家族の2,3名を引き渡された[JQ：Ⅲ,276；JB：Ⅰ,724]。

1289年のシリア遠征の際,王子モンケテムルの率いる左翼軍が,シリアに侵入,ハマとヒムスの間でマムルーク軍と戦った時,アバガ,アフマド,アルグン歴朝の重臣[RA：Ⅲ,184,190,202]であったドラダイは,スカヌト部でジャムチの長官テキナ Takna とともにモンケテムルを補佐していた[RA：Ⅲ,163]。ヴァッサーフはモンケテムル軍の規模を3万人とするが,ドラダイもテキナも万人隊長級の武将ではないであろうか。

さて,『集史』「部族誌」「アルラト部」の項には,[RA：Ⅰ-i,431]

この国でボルジ・ノヤンの子孫は,ベクラミシュ Bīklamīsh と彼の息子ウジャン,またスゲと共に背いて処刑されたトカルが記憶されている。

とある。イルハン国建国に遡る重臣で,歴代諸ハン選出にかかわり,ついに反乱を企てたとしてカザン・ハンによって処刑された武将トカル Tūkāl については,この人物がタマチ軍出身であることが,志茂氏によって明らかにされている[志茂 1994：117-119]。Tūkāl Bahādur は,アラムートのバスカクであり,フラグのシリア作戦においては,Tūkāl Bakhshī なるものが,アレッポ城のシャフネ[RA：Ⅲ,69]に任命されている。彼の息子ジェリクテムルが,アルグン支持の理由で,殺害されているが[RA：Ⅲ,182],トカル自身はアルグンの附馬にして,万人

隊長であった。しかし,『集史』には彼の父の名は記されていない。トカルは,武器長ウジャンの従兄弟であった[RA：Ⅲ,305]が,彼の父ベクラミシュの名は,アラムートを攻撃するフラグの陣営中に見え,ウジャンについて,「アルグン紀」に「太刀持ちの武将の一人 amīr Ūjān ke az umarā-i selāḥ [RA：Ⅲ,211]とある。ウジャンは,ブガの兄弟アルグの僚友(naukar)であったが,ブガの反乱後,アルグと共に殺害された[RA：Ⅲ,115]。アルメニアの主教ステパノスの年代記731/1290年の項に,この反乱にかかわって殺害された人々として,千人隊長ウジャンの名が見える[AIM：41]。ウジャンの息子ベクラミシュの娘エセン Īsān は,ゲイハトゥ・ハンのクマであった[RA：Ⅲ,231]。志茂氏は,トカルの万人隊は,チョルマガンの万人隊起源の軍隊を基礎に政争の過程で得た軍隊であろうとしている。しかし,元来アルラト部の万人隊があったと仮定すれば,トカルやウジャンがイルハンの宮廷で高い地位を与えられた理由を説明できる。ラシドッディーンが彼の個人情報を完全に記さなかったのは,ガザンに背いて殺害されたためであろう。

チョルマガンとバイジュのタマチ軍の活動については,ルームとの関係で井谷鋼造氏の労作がある他,個々の地域,政権に関する論文やモノグラフの中で研究されている。しかし,このタマチ軍の対カリフ活動,高アルメニア,ジャズィーラに於ける軍事活動については,あらためて記述されていない。以下では,このタマチ軍のイラーク・アラビーとディヤールバクル,ルームと大アルメニアに於ける活動について編年的に記述したい。

Ⅱ　イラーク・アラビーとジャズィーラ

ジュヴァイニーとラシードッディーンによるとチョルマガン派遣の第一の目標はジャラールッディーン・ホラズムシャー追討であった。モンゴル軍は,アーミド近郊に急襲したジャラールッディーンを取り逃がしたが,彼はマイヤーファールキーンの山中でクルド人によって殺害された(1231年8月15日)。ジャラールッディーンは生前,アーミドのマリク・マスード,アフラートのマリク・ムザッファル・ガーズィー等アイユーブ朝諸侯,アルトゥク朝のマールディーン君主スルターン・アルトクゥク・アルスラン,イルビールの君侯ムザッファルッディーンとの連合を画策していたが,成功しなかった。モンゴル軍はなおもスルタンの身柄を捜索するとともに,ホラズム敗残兵を追撃した。一隊はジャズィーラ地方の各地の都市を攻撃した。また,別の一隊は大アルメニアでビトリース,アルジェシュ,アフラートを攻撃した。また,第三の部隊はアゼルバイジャンのマラーガを占領,西に進んでザグロス山脈を越え,ジャズィーラに入ってイルビール地方を攻略した。これら一連の作戦はジャラールッディーン包囲を計画したものと考えられる。これに対してイルビールのムザッファルッディーンはモースルの君主と協力してモンゴル軍を撃退し,エジプト・アイユーブ朝のスルターン・アル・カーミルは,自ら遠征軍を率いたが,アルトゥーク朝からアーミドとヒスン・カイファを奪うに留まり(1232年10-11月),モンゴル軍とは遭遇しなかった。

この後,バグダードがモンゴル軍の主要目標となる。次に,モンゴル軍のイラーク・アラビー侵入の経過を示そう。

1231年にモンゴル軍を撃退したイルビールとモースルについては,翌年,630(1232/3)年,モンゴル人は,両市に軍使を送り,大量の織物を要求した。これに関してカリフに報告がなされ,モースルに於ける彼らの為の食糧が増加された[TM:259]。この年はイルビールでは,領主ムザッファルッディーン・コクブリが死亡,住民がカリフが後任として派遣した新領主の入城を拒んで戦闘となった。また翌年にはモースルでもナースィルッディーンが死亡して,アタベク・バドルッディーンがスルターンとして即位した。さらに,モースル,マルディン,アイユーブ朝の連合軍とルームとの間に戦争が始まるなど[BH:399-400;TMD:435]ジャズィーラは混乱状況にあったが,パットン[Patton:52]は,この記事をカリフが,モンゴルの使者の恒常的モースル居住の許可と判断した。このような使者とはシャフナ以外には有り得ないが,少なくともモースルは以後モンゴルの攻撃の対象にはならず,641(1243/4)年にアルグン・アカが,コルグスから受け継いだ地域にルームとともにモースルが数えられ[JQ:Ⅱ,233;JB:Ⅱ,507],1246年8月のグユクの即位式にはモースルから使者が派遣された。

632(1234/5)年のイスファハーン征服後は,ジャズィーラに対する攻撃は激しくなり,攻撃はバグダード近郊に及ぶ。633(1235/6)年,モンゴル軍はイルビールに至って,城兵と交戦後,ニネヴェ方面を略奪して撤退。カリフは,出陣の準備を整えた[TDIF:137;TDIN:232,TMD:436;BH:402;HJAN:84-85]。モンゴル軍は更にスィンジャールを攻撃した[Patton:52-53]が,イブン・バーティーシュ Ibn Bāṭīsh は,モンゴル人のモースル侵入についても述べる[Patton:52]。

634(1236/7)年,モンゴル軍は,イルビールに侵入して,住民多数を殺害。モースル軍,シャラフッディーン・イクバール・アル・シャラービー率いるバグダード軍が接近したので,城塞を40日の包囲後和解金を受け取ってタブリーズに撤退した[TDIF:137;TDIN:233;TMD:437;BH:402;HJAN:98;MZ:699]。

635(1237/8)年,モンゴル軍はバグダードのザンカバード Zankābādh 地方に侵入して,サーマッラーにいたる。ムジャーヒッドッディーン・アル・ダワートダールとアル・シャラービーがこれを迎え撃つが敗北した。年末モンゴル軍はハーネギーン Khāneqīn に現れる。ジャマールッディーン・バクラク Baklak 率いるバグダード守備隊7千人が,約1万(あるいは5千)人のモンゴル軍と戦うが,バクラック戦死後,総崩れとなる[TDIF:140;TDIN:236]。モンゴル軍は大量の略奪品を持って帰還した[TMD:438;BH:404]。カリフは,シリアのマリク・アル・カーメルに資金を送り軍隊の組織を依頼した[ChA:53]。

度重なるモンゴル軍の侵入に,兵力増強の必要を感じたカリフ政権は,『集史』には,639(1241/2)年のことして,[RB:192]

この年,キルマーンにいたホラズム人は,アーナにいた残余の者に加わった。バラカ・ハーンの息子ムハンマドはバグダードに来て,ダワートダールであるムジャーヒドッ

ディーン・アイベクの僚友の中に登録された。

イブン・フワティー[HJAN：143-4]は，この人物を，ムハンマド・タラカン・ハーン・イブン・ダウラトシャーとする。ムハンマドはアレッポの軍勢に敗れてカリフの保護に入るのやむを得なくなったもので，彼に続いてクシュル・ハーンの息子 Ibn Kushul Khān もカリフ領に入った。

642(1244/5)年にもモンゴル軍はバグダードを攻撃したが，成果なく撤退[BH：410；TMD：446]した。

643年(1246/7)には，6万人のモンゴル軍がハマダーンを出撃，ジャバル・ハムリーン Jabal Ḥamrīn を攻撃し，一部はハーネギーンに向かい，チグリス川を渡り軍隊や住民を殺した[HJAN：199]。またバグダード近辺のバクーバ Bāqūba に到る[TDIF：149；TDIN：258]。

1246年8月のグユク即位式には，大ガーディー・ファフルッディーンが出席した[JQ：Ⅰ，20；JB：Ⅱ，250；RA：Ⅱ-i；RB：181]が，

> バグダードからの使節によって，カリフに対しては，チョルマガンの息子シュレミュンが彼らについて述べた苦情の故に脅迫と威嚇が送られた[RB：184]。

1230年代には，カリフ領であるイルビールを除いてジャズィーラは，モンゴル軍の侵入から安全であったが，1240年代に入って，状況が変わった。先ず，アイユーブ朝に対しては，638(1240/41)年マイヤーファーリキーンの領主マリク・ムザッファル・アル・ガーズィーのもとに降伏勧告の使節が送られ[TDIF：144；TDIN：242]，641(1243/4)年にはヤサウル・ノヤンが，マイヤーファーリキーン，マールディーン，エデッサ(ウルファ)を経由して，アイユーブ朝の治めるシリアを略奪し，アレッポの門外ハイラーン Ḥailān にまで至り，[TMD：446；BH：409]，帰途メリテネ Melitene を略奪した。マキーンが[ChA：74-75]，この年マイヤーファーリキーンの領主マリク・アル・ムザッファル・シハーブッディーン・ガーズィーが，ホラズム，トルコマンの兵士の増援のもとアレッポ占領を計画したが，ヒムスの領主アル・マンスールのためにハーブール Khābūr で撃破されたと記すのは，モンゴルの対アイユーブ朝政策の一定程度の勝利であろう。しかし，最終的には，ラシードッディーンは，

> 642(1244/5)年，モンゴルの一部隊が再びディヤールバクルに侵入し，ハッラーンとルハーを占領し，マールディーンを平和な手段で奪った。シハーブッディーン・ガーズィーはエジプトへ逃げた[RB：193]。

と述べ，イブン・フワティー[HJAN：194]もモンゴル軍の一部隊がマイヤーファーリキーンを攻め，ガーズィーが，逃亡したので，ディヤールバクルを略奪し，ハッラーンとルハー(エデッサ)を占領したことを述べている。これに関して，セヴァスタッツィ[AIM：28]は，

> 694/1245年，彼らはアフラートに侵入し，マリク・アシュラフと結婚していたアヴァグの妹タムタに与えた。

と述べる。タムタはグルジア王国の元帥イヴァネ・ムハルグルヅィエリの妹であるが，アイユーブ朝のマリク・アシュラフの妻で，ジャラールッディーンがアフラートを占領後はホラ

ズムの捕虜となり，更に，ジャラールッディーン死後は，ウゲディの宮廷に留まっていた。

イブン・ジャウズィー[MZ：754；c.f., NA：312]は，643(1245/6)年の記事に，

アル・マリク・ムザッファル・シハーブッディーン・ガーズィー・イブン・アル・マリク・アル・アーデルのもとに書が遣わされ，妾は汝の兄の妻である。カーンは妾にヒラートを与えた。もし，汝が妾と結婚するのであれば，国は汝のものである。その場合はヒラートとその属地に住まなければならぬと述べられた。彼は，余にはマイヤファールキーンが大事であると言って，彼女に応じなかった。

これは，モンゴルの対アイユーブ朝政策の一環で，640年にルームがアフラートをガーズィーに譲渡しようとしたことへ[NA：201]の反応であるが，この試みは成功を見ず，650(1252/3)年，モンゴル軍は再びジャズィーラに侵入し，マイヤーファーリキーンとサルージュ Sarūj の近郊に来て虐殺を行った[TDIF：156；TDIN：262]が，マイヤーファールキーンの征服はフラグの遠征に待たねばならなかった。

バイジュ軍は毎年のような遠征にもかかわらず，バグダードは勿論イルビールさえ恒常的に確保することはできなかった。カリフ政権はホラズムの残党軍の一部を吸収し，武力増強に務めていた。バグダードを落すためには，1258年の例で明らかのように長期間にわたる本格的包囲が必要であったが，そのような作戦はジャズィーラを確保しない限り不可能である。また，北からジャズィーラに至る侵入路にはルームが立ちはだかっていた。対ジャズィーラ作戦はコサダグ戦の結果を待たなくてはならなかった。

Ⅲ ルーム=セルジューク朝

モンゴル軍は1231年，ルームと大アルメニアで掃討戦を実施した。セバスタッツィが，

688/1231年，モンゴル軍は，エルズィンジャンへ行き，人々を玉葱のように切り刻んで，皆殺しにした[AIM：34]。

と述べ，またイブン・ビービー[ASR：183]が，629(1231/2)年にモンゴル軍の先鋒がシワス近郊を略奪したと述べ，ステパノス[AIM：34]が，

682/1232年，モンゴル人アフラートを取る。

とあるのは，前年来の作戦の継続であろう。この間の事情は井谷氏の研究に詳しく，1232(630)年，ルーム軍は，ホラズム人がアルメニアで略奪をおこなったのに対して，アイユーブ朝が対処しなかったのを理由にアフラートを占領する。この後アフラートのアミール職を与えられていたスィナーヌッディーン Sinān al-Dīn は，ホラズム人を帰順させることに成功するが，このホラズム軍4000人は，700人のモンゴル軍に攻撃されて敗走する[井谷 1989：126-127]。バルヘブラエウスは[BH：399]，1543年(ギリシャ暦，西暦1232年)に

タタール人が出撃して，いくつかの町々を荒し，ペルシャへ帰った。スルターン・アラーウッディーンは彼らに敵する者が誰もないのをみて，どのような貢納を支払うべきか決

心し，彼らと友誼を交わした。タタール人の心配がなくなったので，アラーウッディーン・スルターンは，アシュラフからアフラートを取り，また Darmānīā から，スールマリの町ともども多くの城を取った。

あるいは[TMD：435]，

630(1232/3)年ルームは大カーンのもとに遣使し，服属を申し出る。この年スルターン，アフラートとスルマリを取った。

と述べる。同じくステパノスも[AIM：34]

682/1233年，トルコ人がアフラートに侵入し，多数の略奪品を取る。

と述べる。ステパノスは，スルプマリについてはここでは述べないが[AIM：34]，

684/1235年，ザカレの息子シャヒンシャフ Shahinshah，聖マリア Surb Mari を奪う。

と述べている。またキラコス[PHKh：166-7；PHM：260；PHA：188；Dul：239]は，モンゴル人は1236年に，少し前にイスラム教徒からシャヒンシャフとアヴァグが奪ったスリブマリを取ると述べている。ルームのスルタンが，モンゴル人に貢納を納めた，あるいはウゲディに使節を派遣したと記すのは，バルヘブラエウスのみであって，しかも，チョルマガンに一時的に贈り物を納めたのか，ウゲディのもとに使者を派遣したかは，非常に違うことであるのに，その区別が曖昧である。井谷氏が，バルヘブラエウスの説を採らないのは妥当な判断であると思われる。一方モンゴル軍は，ホラズム軍に対しては攻撃したが，ルームに対しては慎重な態度を取ったが，タマチ軍の対バグダード作戦も，ユーフラティス上流を通らず，ザグロス山脈越えのルートからイルビールとバグダードを攻撃するというものであった。

一方，セルジューク朝とアイユーブ朝は，アフラートを巡って紛争を抱えていたが，630(1232/3)年，戦争に発展した。バルヘブラエウス[BH：399-400]によると，アーデルの息子達が，ルームからアフラートを奪取するために兵を起こし，ズィヤード(ハルトベルト)城主，マールディーンの君侯，モースルの君侯，サラーフッディーンの息子のアフザル，スマイサートの君侯，マダーイェーとタグラーバーイェの多数の人々が加わり，ルーム側は，フランク人，ギリシャ人，アルメニア人，グルジア人，ホラズム人が，アシュラフの軍勢に対抗した。戦闘は1234年に始まったが，エジプトの援軍は退却し，ルーム軍はヒスン・ズィヤードを落とし，スマイサートを攻略した。ステパノスも，683/1234年，ルームがハルトベルトを奪取した[AIM，24]と記している。ルーム軍は，冬期間一旦兵を引いた後，翌年再度兵を起し，アーミドに遠征した。しかし，この城の守りの固いことを知り，エデッサを，別動隊はスィーバーバラーク，ラッカ，ハッラーンを取った。エジプトのスルタン・アルカーミルはこれを聞いて，軍隊を送り，エデッサを奪還した。ルーム軍は翌1236年にもアーミドを攻め包囲攻撃を加えたが，陥落させることはできなかった。1237年スルタンは三度アーミド攻撃を計画，クルド，フランク，ホラズム，アルメニア，グルジア人からなる軍隊を集めたが急死した[BH：402]。

ところが，ここで再びモンゴルとルームとの衝突が生ずることになる。アルメニア人の年代記作者主教ステパノスは[AIM：35]，

638/1239年，モンゴル人がカリンに侵入して，破壊する。トルコ人カルスを攻撃する。

とある。アルメニア人の言うカリンは，エルゼルムであるが，この事件は，バルヘブラエウス[TMD：439]が，

637年(1239/40)，ルームは，モンゴル軍の侵入を阻止するためにアルメニアで戦う。

と述べるのに同じであろう。より詳細には次のように言う[BH：405]。

タタール人が来てグルジアからエルズルムまでの地域を略奪し始めた。ルームの軍隊は召集をうけ，タタール人がルームへ侵入するのを阻止するためにアルメニアに入った。タタール人は軍隊が集結していることを聞くと，引き返した。

1236年モンゴル軍は突然シルヴァーンシャー領，グルジア王領の征服事業に着手し，1238年には，グルジア西北部を除く全ザカフカースを征服した。エルゼルム攻撃は，カルス征服の延長戦上の出来事であったかもしれないが，1238年にモンゴル軍が占領したグルジア王領のカルスをルームが占領したとすれば，状態は深刻である。バルヘブラエウスによると，1241年，モンゴル人の攻撃に備えるためにエルゼルムの司令官に任命された，スィナンが敗死した[BH：406]。コサダグの戦いの前年である1242年についても，バルヘブラエウスは，モンゴル軍が，ヒスン・ズィヤードに至る地方を攻撃したとする[BH：406]。セヴァスタッツィ[AIM：28]，ステパノス[AIM：35]も，モンゴル軍の1242年のエルゼルムに遠征について記しており，イブン・アル・アディーム[HA：263]は，640(1242/3)年にモンゴル人がエルゼルムを攻め，ハルタベルトまでの地域を略奪したことを述べている。

モンゴルとルームは，初期にアフラートの領有やホラズム残兵の処置について，若干の問題を有していたが，1239年以降，アルメニア領有を巡って再び緊張が高まり，1243年のコサダグ戦に至った。このような状況のもとでモンゴル軍のジャズィーラ遠征が開始されるが，成果は，ルーム，モースル，シャームの使節のグユク即位式出席に現れたと言えよう。

結論

小稿は，チョルマガン・タマチ軍の対外活動の一端について，簡略な展望を述べたものである。チョルマガンは，ルームやジャズィーラに対する遠征を差し控え，バグダードに遠征活動を集中したが，ほぼ毎年の遠征にもかかわらず，目的を達成することが出来なかった。モンゴル軍のルーム攻撃はチョルマガン在任中に開始されたが，後継者バイジュの活動は，ルームを牽制してジャズィーラを確保し，バグダードを圧迫することにあったと評価することができるが，成果はフラグの来着以前にバグダード遠征の左翼軍経路を確保したことに留まった。ルーム，ジャズィーラ関係におけるモンゴルの立場は，ジャラールッディーンの立場に酷似している。しかしジャラールッディーンの失敗の原因は，ルームとジャズィーラの対ホラズム同盟であったが，モンゴルは両者の隔離に成功したことが，ルームやジャズィーラ征服につながったと判断してよいであろう。

注

1） この人名のペルシア語，アラビア語表記は，Chūrmāgūn, Jūrmāghūn，アルメニア語では，Chormaghan である。これに対応するモンゴル語は，Chormaqan, Churbaghan, Churbaghan（雛，若鷹の意）であるという（『モンゴル秘史』村上正二訳注，第三巻，293頁）。ここではチョルマガンと表記した。

2） チョルマガン・ノヤンの軍事統治組織は，従来「アゼルバイジャン」の地名を冠された。しかし，チョルマガンとバイジュの冬の営地は，ガンジャやバルダ，夏はセヴァン湖周辺である。アゼルバイジャンの名を冠すると誤解を生ずる場合もあろう。ここでは，チョルマガン・タマチ軍と表現することにした。

3） 萩原淳平「木華黎王国下の探馬赤軍について」『東洋史研究』36(2)1977，松田孝一「モンゴル帝国東部国境の探馬赤軍団」『内陸アジア史研究』(7/8) 1992，大葉昇一「元代の探馬赤軍」および「元代の探馬赤軍再論」『モンゴル研究』(15)1987，(18)1987。ただし，タマチ軍の性格については，まだ定説は見ていない。

参考文献

AIM : Galstyan, A., G. *Armyanskiye istochniki o Mongolakh, Moskva*, 1962

ASR : Meshkūr, M.J. *Akhbār-i Salājqa-i Rūm*, Tehrān, 1350

BH : Bar Hebraeus. *The Chronography of Gregory Abū'l Faraj*. Translated by Ernest A.W. Budge. 2 vols. London, 1932

ChA : Al-Makīn ibn al-'Amīd, *Chronique des Ayyoubides*, Traduction française annoté par Anne-Marie Eddé et Françoise Micheau, Paris, 1994

ChV : Vardan Areveltsi, *Chronicle*, ed., R. W. Thomson, NY, 1991

Dul : Dulaurier, E., Les Mongols d'après les historiens arméniens, *JA*, Fév. -Mars, Juin, 1858 ; Oct. -Nov., 1860

FLo : Hetoum, *A Lytell Chronicle*, ed. by Glenn Burger, London, 1988

HA : Dahan, S. *Histoire d'Alep par Kamāl ad-Dīn ibn al-Adīm*, 3, Damas, 1968

HJAN : Ibn al-Fuwatī, *al-Ḥawādith al-jāmi'a wa'l-tajārib al-nāfi'a*, Baghdād, 1351

JB : Boyle, J.A., *The History of the World-conqueror*. 2vols., Manchester. 1971

JQ : Juvainī, 'Alā' al-Dīn 'Aṭā Malik, *Tar'īkh-i Jahān Gushā'ī*, ed., Mīrzā Muḥ. Qazwinī, 3 vols. Leiden & London, 1912-1937

KTsB : Brosset, M.F., *Histoire de la Géorgie*, St. Perterbourg, 1849-1851

KTsK : Kiknadze, R. *Zhamtaaghmts' ereli ; Asts' lovani Mat'iane*, Tbilisi, 1987

MZ : Sibṭ ibn al-Jawzī. *Mir'āt al-zamān*, 2, Haidarābād, 1952

NA : Nuwairī, Shihāb al-Dīn Aḥmad. *Nihāyat al-'Arab*, vol. 29, Qāhira, 1992

PAN : Blake, R.P. & R.N. Frye. History of the Nation of the Archers, *HJAS*, 12(3)1949

PHA : Sahakyan, *Kirakos Gandzaketsi Hayots Patmut'yun*, Yerevan, 1982

PHKh : Khanlaryan, L.A. *Kirakos Gandzaketsi Istoriya Armenii*, Moskva, 1976

PHM : Abrahamyan, A.A, yev ur., *Kirakos Gandzakets'i Patmut'yun Hayots'*, Yerevan, 1982

PHM : Melik-Ohanjanyan, K,A. *Kirakos Gandzakets'i Patmut'yun Hayots'*, Yerevan, 1961

RA : Rashīd al-Dīn Faḍl-Allah, *Jāmi' al-Tawārīkh*, 1-i, 2-ii, 3, ed. Alizade, Baku i Moskva, 1957-1980

RB : Boyle, J. A., *The History of Successors of Genghis Khan*, London & New York, 1971

SJM : Nasavī, *Sīrat-i Jalāl al-Dīn Mankbīrnī*, ed. M.Mīnūvī, Tehran, 1344

TDIF : al-Dhahabī. *Kitāb duwal al-Islām*, Qāhira, 1974

TDIN : Nègre, A.*Al-Dahabi, Kitāb duwal al-Islām*, Damas, 1979

TM : Ibn Naẓīf al-Hamawī, *al-Ta'rīkh al-Manṣurī*, Dimashq, 1981

TMD : Ibn al-'Ibrī. *Tar'īkh mukhtaṣar al-duwal*, rep. Beirut, 1983

Zhi : an-Nasavi, *Zhizneopisanije sultana Dzhalal ad-Dina Mankburny*, Baku, 1973

井谷鋼造(1988)モンゴル軍のルーム侵攻について『オリエント』31-2

志茂碩敏(1944)『モンゴル帝国史研究序説』東京大学出版会

Patton, D. (1991) *Badr al-Din Lu'lu', Atabegs of Mosul, 1211-1259*, Washington.

(弘前大学人文学部)